



次にやる時には、
新しい白石さん、新しい蜷川幸雄像で行こう

ね。これは映像で観てもちょっと面白くないと思いますが、この空気を共有するとすごく人間に対する信頼関係というか、直接性がいいなと、僕などは思って演劇から逃れられないのですが、芝居ってそういう所がありますよね。

S そうですね。

N 白石さんとはお友達で、デビューが同時代にそれぞれの劇団で出てきたんですね。だからある種同窓生のような気分の所があるのです。それが僕らがある所では親密にしたり、自由にさせてもらえるのです。だから白石さん今みたいな役ばかりではなくて、「いい女をやろう。いい女をやろう」といつも言ってるよね。

S ウソばかり。汚い役ばかりやらせて。(笑い) 最初に蜷川さんに他の自分がやりたい作品を持ってお尋ねしたら、目の前で断ったじゃないですか。「俺、イヤだよ」と、すごいですよね。そういう方にお会いしたのは初めてでした。でも、少ししたら、その気持をケアしてくれるようにお誘いがありました。その時の最初にきたお話は、シェイクスピアの『夏の夜の夢』というお芝居でした。当事の私はストイックな女優でしたから、ああいう祝祭劇は私には合わないと思っていたので、お断りしようと思っていたのですが、今度の翻訳家の松岡(和子)さんという人が電話で怒鳴り込んできました。「蜷川さんとの大切なこういう機会をもし逃がすとしたら、本当にあなたは愚かだ」と言うのですよ。「そうかな」と思って怖々出させて頂きました。

N 一番最初に頂いたお話の役が、どうもそれまでの白石さんを打ち壊すような力があるように思えないと思ったので、それだったら無理と思ったのです。

でも『夏の夜の夢』はとても面白かったね。お金がないからカツラ

を作れなかったのです。それで金網でカツラのベースを作り、黒いゴミ袋を買って、はさみで切ってわかめみたいに結わえていました。その上に造花を付けていました。その造花も有名なアートフラワー作家の飯田深雪さんのお宅にいて、「いらなくなった造花を下さい」と言って自分たちで頭に付けて作りました。

S 私は妖精の女王だったのですが、私の花冠は蜷川さんが作ってくださったの。それはもう、すばらしく美しかったのですよ。

N 白石さんの演技が驚くべき柔軟さで、まず軟体動物みたいに、身体がグニャグニャになっていき、声も何通りの声が出て、地をほうような、低い声から、ヨーロッパ的な朗誦も白石さんはできるから、地べたから天空までがあるのです。「いい女優さんだなあ。ここを鈴木(忠志。注:当時、白石さんが所属していた劇団SCOTの主宰者)に独占させておくのはおしいなあ。取っちゃえ」という感じでした。あれは楽しかったですね。ロンドンも行ったのですが、ロンドンでも受けたよね。

S ロンドンでは『夏の夜の夢』は学芸会で誰もが一度はやるみたいですよ。だからお客様全員がセリフを知っているのです。日本語でやっているのにすごい受け方で、日本語が分かるのではないかとというぐらいでした。

お母さんと妖怪。
両方をできる女優は稀有

N 白石さんと一緒にやった『身毒丸』のシーンをお観せしましょう。(ビデオ放映)

これは、お母さんが死んでしまったから新しい母を買いに来よう。



自堕落な身体で綺麗な声を出すような、
分離したようなことが好き

お母さんは取り替えがきく、買えるものだ、と思ってお母さんを買いに来るのです。観てほしいのは、白石さんが演じているのですが、買われてきた、娼婦のように売られていた女が、町の女から主婦になる瞬間です。まず髪型を白石さんが変えます。座って、髪型を確認して、着物を合わせたりしています。お手伝いさんが何かを手伝っています。おっと主婦になりました。母になったのです。

これは台本ではたいして書いていないのですが、どうやってつないでいくか、引き抜きとか、歌舞伎の伝統を入れたりしながら一瞬で変わっていくということで見せたわけで、それが我々のやった共同作業だったのです。

あと終盤では、子どもを失ったお母さんが地獄で子どもを捜している、地獄というよりも死の世界で、妖怪よりの白石さんもお見せしましょう。(ほら、妖怪が出た。(笑い)(ビデオ終了)

お母さんになっていく白石さんと、変化した白石さんと二つのパターンを観て頂きましたが、ここにいる白石さんもいるので三つのパターンを見て頂きましたが、やはり過去のいろいろな演劇をやってきたことがこういうところでは自在に白石さんは操っているということはあると思います。近代的な演技の体系でいうと、前者はできても後者はできにくいのです。ですから両方を一人の女優さんが併せ持つてやるということは、実は単純に見えて希有な例なのです。それができるのは、過去の演劇的な体験や、受けた教育、示唆と関係があるのか、自分の中に本来あったものが開花してきて、変形してきて出てきたものかをお聞きしたいということです。

S リアリズムとよく一般にいわれるような役作りだと、こういう

女性像は破綻しますよね。やはり私、どちらかというところ、リアリズムは不得手ですね。例えば先ほどみたいにとっても自堕落な身体をしながら綺麗な声を出していくような、分離したようなことはとても好きで、だから自分の中にも少しだけでも鬼になりたいような気分があると、そこから広げて鬼にもなります。だからある時期から破綻を来す役とかはとてつもなく魅力を感じるが、一般的なその辺の奥様とかを魅力的にやるのはちょっと大変というところがあって、趣向がそっちへ行ってしまう。

N そうするのは自分でうまくいかない。あるいはやりたくないの。

S やってみたいのだけれど、やってみるとちょっと魅力的ではないと自分で分かっちゃうわけです。

N 統一していくよりは分裂させていく方が自分ではきっと面白いのです。そういう物を突き動かすものは何なのですか。その人の資質だといってしまえば簡単なのですが、何がそっちに行かすのだろう。

S 例えば小さい時に習った日本舞踊は、やはり歌舞伎とかそういう物の系列だが、歌舞伎みたいなものは、やはり山姥を演じたり、女郎蜘蛛のようなものが出てきたりとか、七変化していくでしょう。自分の資質としてああいうものにどこか魅力を感じている所があると思います。だから近代劇みたいなものが苦手ですね。何か近代劇で向きそうなものを蜷川さん演出してよ。

N 分かった。そういうものもやってみたい気がするんだ。次に白石さんとやる時には、ちょっと新しい白石さん、新しい蜷川幸雄像でいける。これが結論かな。

S わー、やった。(拍手)